岡山芸術交流2019
Okayama Art Summit 2019

実施計画

平成 30 年 11 月 2 日
岡山芸術交流実行委員会

目　次

1　開催趣旨 3
（1） 趣旨 3
（2） コンセプト 4
（3） ロゴマーク 5
2　開催概要 6
（1） 名称 6
（2） 会期 6
（3） 会場 6
（4） 主催 8
（5） 重点取り組み 9
3　現代アート展 10
（1） 方向性 10
（2） 参加アーティスト 10
（3） 会場 14
4　ラーニングプログラム 19
（1） 方針 19
（2） 取組概要 19
（3） 具体的な取組 19
（4） スケジュール 19
5　パブリックプログラム 20
（1） 方針 20
（2） 取組概要 20
（3） 具体的な取組 20
（4） スケジュール 20
6　学校連携 21
（1） 方針 21
（2） 取組概要 21
（3） スケジュール 21
7　広報 22
（1） 方針 22
（2） 取組概要 22
（3） 情報発信活動 22
（4） 広報ツール 23
（5） スケジュール 23
8　来場者対応 24

（1） 方針 24
（2） 取組概要 24
（3） スケジュール 24
9　サポートスタッフ 25
（1） 方針 25
（2） 取組概要 25
（3） スケジュール 25
１０　連携・協賛 26
（1） 方針 26
（2） 連携概要 26
（3） 具体的な取組 26
（4） 協力・協賛 26
（5） スケジュール 27
１１　鑑賞券、オフィシャルグッズ 28
（1） 方針 28
（2） 取組概要 28
（3） スケジュール 28
１２　全体スケジュール 29

1　開催趣旨

（1） 趣旨

岡山市は、温暖な気候や交通の利便性などから、近年は大都市圏からの移住先として人気が高まっています。一方で、都市の魅力の発信という点では、こうした環境面でのポテンシャルの高さを活かしきれていないという指摘がたびたびなされています。

さらに岡山市中心市街地においては、様々な施設の整備・開発が進んでいる岡山駅周辺エリアに対し、旧城下町エリアの賑わいの核としての地位が相対的に低下しており、その解決のため、中心市街地の回遊性向上や街の魅力向上が急務の課題となっています。

旧城下町エリアは、戦国末期の岡山開府以来 400 有余年の歴史を誇る岡山のルーツともいうべきエリアです。そこで培われてきた文化が岡山らしさを、岡山の魅力を生み出してきたことを考えると、このエリアの賑わい復活は、中心市街地活性化に止まらない、「岡山の顔」の再生に他ならないと考えます。

そこで、私たちが着目したのが、「芸術文化のもつ創造性」です。

2016 年 10 月 9 日から 11 月 27 日までの 44 日間、岡山城・後楽園周辺ゾーン内において、徒歩圏内の歴史・文化資源を活用した会場に最先端のコンセプチュアルアートを集結したコンパクトな展示をコンセプトとし、「開発｜Development」をテーマとした国際現代アート展「岡山芸術交流 2016」を開催しました。

会期中、延べ 23 万 4 千人が来場し、展示作品群への明確なコンセプトや、他の芸術祭とは一線を画す姿勢、「小旅行気分」「歩いて回れる手軽さ」、展示会場となった近代建築物、オリエント美術館における館蔵品とのコラボレーション展示や大型屋外展示など来場者や専門家からも高く評価されました。

「岡山芸術交流 2016」を通じ、わたしたちはアートに秘められた国境・地域・性別・世代の違いを超えて人と人、街と人をつなぐ無色透明の接着剤としての力を強く感じました。アートを通じて、国内外から岡山の街に様々な人々が集い、交わり、絆を深めあう。アートが人々の想像力を刺激し、新たな未来を創り出そうとする力をはぐくんでいく。そして人と人、街と人との新たな出会い、思いがけない組み合わせが生み出す化学反応は、新しい価値の創造のみならず、私たちの街・岡山のよさの再認識にもつながっていく。アートの力が岡山の新たな未来、新たな魅力を創り出していく原動力になると確信しています。

また、2018 年 7 月に発生した西日本豪雨災害により、岡山市をはじめ、岡山県は甚大な被害を受け、国内外の観光客数も災害前に比べ減少傾向にあります。この「岡山芸術交流 2019」の開催が、世界中の目を岡山へ向けさせ岡山来訪の機運を生み出し、観光客数の回復、さらなる賑わいの創出、ひいては復興の一助に寄与するものと期待しています。

（2） コンセプト

○ 歩いて楽しむ

岡山城・後楽園周辺ゾーン内において、徒歩での回遊が可能な圏内に会場を複数配置したコンパクトな開催とする。

○ 資源を活かす

岡山城・後楽園・美術館・文化施設等、ゾーン内に立地する様々な歴史文化資源の特性を活かした展示を展開し、美術鑑賞と観光の融合を目指す。

○ 世界を見る

アーティスティックディレクターが示す方向性に基づき、岡山で世界からも注目を集める最先端のコンセプチュアルアート作品を集結させた展覧会を目指す。

○ 人を育む

開催を支える人材、特に将来の地域文化の一翼を担う若手人材の育成を推進する。

（3） ロゴマーク

デザイン：ピーター・サヴィル　Peter Savill

1955 年、イギリス・マンチェスター生まれ。イギリスを代表するグラフィックデザイナーで、1970 年代から 80 年代にかけて手がけた、マンチェスターのインディペンデント・レコード・レーベル「ファクトリー・レコーズ」のジャケットのデザイン（特にジョイ・ディヴィジョン、ニュー・オーダーなど）で広く知られる。その活動は音楽関連に止まらず、アドビシステムズ、CNN、ジバンシィなどイギリス国内外の有名企業のデザインも手がける。

アーティストとしても活動しており、「岡山芸術交流 2016」では、アナ・ブレスマン（Anna Blessmann ：1969 年ドイツ・ベルリン生まれ）とのアーティストユニットとして、旧後楽館天神校舎会場にて「触れる作品」（Touching Work）を展示、子どもたちを中心に人気の作品となった。

デザインコンセプト：

オーケー（いいね）、岡山。
オーケー（いいね）、岡山芸術交流。

今や世界の共通言語であるオーケー。いいね、を意味する、その2文字の形と音を「オカヤマ」の英語表記と音に重ねたのが今回のロゴデザインです。オーケーという記号が表す肯定の姿勢を、岡山と岡山芸術交流に反映させ、ロゴデザインを目にした人に岡山への興味、岡山芸術交流への賛同を促します。

さらにこのデザインは、デザイナーであるピーター・サヴィルの個性、クールでシンプルなサヴィルらしさをあますところなく発揮しているのも注目点。サヴィル自身の世界的な知名度とあいまって、国際社会においても普遍的かつ認知度の高いロゴデザインとなるでしょう。

２　開催概要

（１） 名称

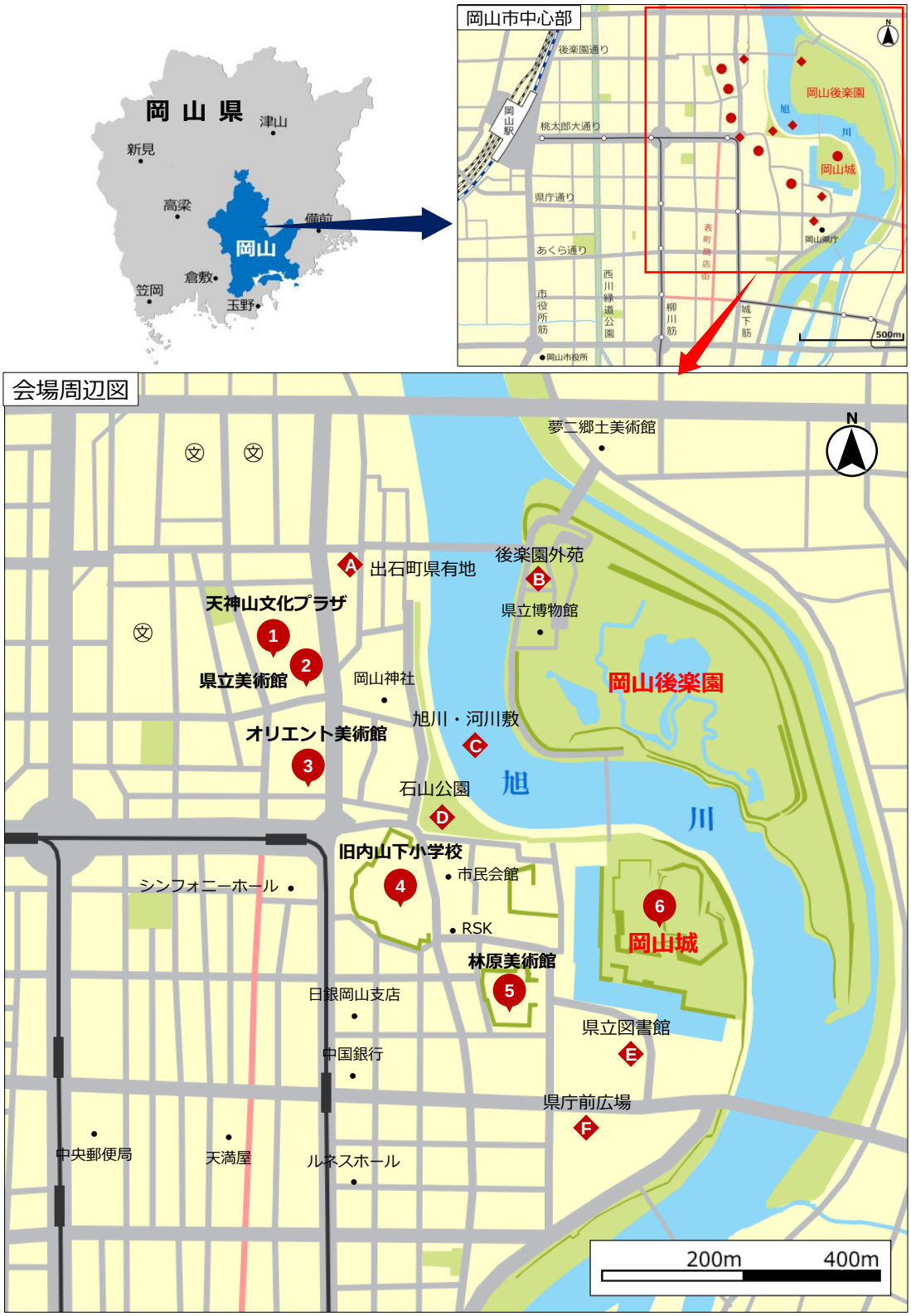
岡山芸術交流 2019（おかやま げいじゅつ こうりゅう　にせんじゅうく）
（英語表記）　Okayama Art Summit 2019

（２） 会期

2019 年 9 月 27 日（金）～　同 11 月 24 日（日）　開館日は計 51 日間。
月曜は休館とする。ただし、祝日の場合（10 月 14 日、11 月 4 日）は、その翌日火曜日を休館とする。

（３） 会場

岡山城・後楽園周辺の歴史・文化ゾーン内において徒歩で移動が可能なコンパクトなエリアに会場を配置する。主要会場は、旧内山下小学校、岡山県天神山文化プラザ、岡山市立オリエント美術館、林原美術館、岡山県立美術館、岡山城など。加えて、岡山県庁前広場などの屋外展示を行う予定。



※会場：数字は屋内展示。アルファベットは屋外展示の候補地。

（4） 主催

岡山芸術交流実行委員会

会　長　　大森雅夫（岡山市長）

副会長　　佐藤兼郎（岡山県副知事）

〃　　岡﨑　彬（岡山商工会議所会頭）

監　事　　宮長雅人（株式会社中国銀行取締役頭取）

総合プロデューサー　　石川康晴（公益財団法人石川文化振興財団理事長）

総合ディレクター　　那須太郎（TARO NASU 代表/ギャラリスト）

アーティスティックディレクター　　ピエール・ユイグ（アーティスト）

パブリックプログラムディレクター　　木ノ下智恵子（大阪大学共創機構社学共創本部（兼 21 世紀懐徳堂）准教授）

顧　問　　宮武　博（岡山市議会議長）

〃　　越宗孝昌（株式会社山陽新聞社会長）

〃　　槇野博史（国立大学法人岡山大学学長）

構成団体　岡山市・岡山市教育委員会／岡山県／岡山商工会議所／(公益社団) おかやま観光コンベンション協会／岡山カルチャーゾーン連絡協議会／大学コンソーシアム岡山／㈱山陽新聞社／山陽放送㈱／岡山放送㈱／テレビせとうち㈱／(公益社団) 岡山県バス協会／(一般社団) 岡山県タクシー協会／西日本旅客鉄道㈱／㈱中国銀行／(公益財団) 石川文化振興財団

［アーティスティックディレクター］

ピエール・ユイグ　Pierre Huyghe

Photo credit: Ola Rindal

［略歴］

1962 年、フランス、パリ生まれ。現在はニューヨークを拠点に制作活動中。

ピエール・ユイグの作品は広範囲にわたる生存形態や、無生物、科学技術によって特徴づけられた複雑なシステムとしてしばしばその姿をあらわす。ユイグの構築した有機的組織体は、生物学的要素と科学技術的要素、そして架空の要素を結合させるだけではなく、(仮想現実)没入型の、常に変化し続ける環境を作り出す。

その環境のなかで、ヒトや動物、非存在もまた学習し、進化し、成長する。

2001 年に参加した第 49 回ヴェニス・ビエンナーレ（イタリア）にて審査員賞受賞、

同年は第1回横浜トリエンナーレ（日本）にも参加。2002年ヒューゴ・ボス賞受賞。
2012年第13回ドクメンタ（ドイツ）、2014年第10回光州ビエンナーレ（韓国）、
2017年第5回ミュンスター彫刻プロジェクト(ドイツ)など数々の大規模国際展覧会に参加。
2013年にポンピドゥ・センター（フランス）を皮切りに国際的に巡回した回顧展や、
2015年のメトロポリタン美術館（アメリカ合衆国）のルーフガーデン・コミッションなど
世界各地の著名美術館での個展多数。
現在はサーペンタイン・ギャラリー（イギリス）にて個展開催中(2019年2月10日まで)。
2016年第1回岡山芸術交流では、頭部が蜂の巣で形成された彫刻や、仮面をかぶった猿の映像を含む三作品が林原美術館に展示され話題を呼んだ。イギリスのアートメディア Art Review が毎年発表している「Power100」(現代アート界で影響力のある100人)2017年版で2位にランクされるなど、現在、今後の動向が最も注目される美術家のひとりである。

（5） 重点取り組み

① 地域への浸透

市民・県民、産業界、教育機関、文化団体など様々な主体の参画を促し、地域への一層の浸透を図る。

② 学校鑑賞の強化

前回開催において好評であった県内小学校・中学校の校外学習による鑑賞の支援を強化する。併せて高等学校や創造系の専門学校、大学への鑑賞の働き掛けも積極的に行う。

③ 運営を支える人材の育成

「岡山芸術交流」の運営を支える人材の育成を強化する。特に地元企業に加え、市民・県民、学生の参加を増やすとともに、芸術交流運営に係る内容のほか、独自イベントの実施、まちづくり・観光など幅広い分野の研修を行うなど活動内容の充実を図る。

④ 海外への発信

国内外、特に海外への発信を強化し、世界的な現代アート国際展としての「岡山芸術交流」の評価の確立・浸透に努めるとともに、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催による日本への注目度の高まりも見据えて、開催地・岡山の魅力発信も併せて展開し、海外からの誘客に結び付ける。

3　現代アート展

（1） 方向性

自己発生的な超個体（スーパーオーガニズム）は暫定的設定のもと、一種の思惑に庇護されながら永続的に学習と成長を続けていく。
その超個体は他者への関心をもたない予測不可能な存在として、絶えまなく自らを改造しながら、生物と人工生命体による認知及び行動のさまざまな領域から出現する。

A self-generating superorganism is learning and growing permanently in a conditional set up, under a speculative umbrella.
Indifferent and unpredictable, it emerges from different realm of cognition and behaviors of biotic and artificial life forms, constantly modifying itself.

（2） 参加アーティスト

イアン・チェン
Ian　Cheng

1984 年、ロサンゼルス生まれ。
現在はニューヨークを拠点に活動。
モーションキャプチャーなど最先端のアニメ技術を使い、人工的に作られた事物が異種混合的に絡み合う映像作品を制作している。
近年の個展として、2018 年サーペンタイン･ギャラリー（ロンドン）、2017 年 Moma PS 1 、2015 年サンドレット・レ・レバウデンゴ財団現代美術館（トリノ）、デュッセルドルフ美術館（デュッセルドルフ）、2014 年ミラノトリエンナーレ（ミラノ）などがある。
主なグループ展として 2017 年横浜トリエンナーレ、2016 年リバプール・ビエンナーレ、2015 年パリ市立近代美術館（パリ）、オルブライト＝ノックス美術館（アメリカ合衆国）、2014 年台北ビエンナーレ（台北）、2013 年リヨンビエンナーレ（リヨン）、Moma PS 1 （ニューヨーク）、2012 年スカルプチャーセンター（ニューヨーク）など多数。

Ian Cheng
Bag Of Beliefs (BOB)
artificial lifeform, 2018
Serpentine Gallery, London
Photo by Andrea Rossetti

ファビアン・ジロー＆ラファエル・シボーニ
Fabien Giraud & Raphael Siboni

ファビアン・ジロー（1980 年生まれ）とラファエル・シボーニ（1981 年生まれ）により結成。2007 年よりパリを拠点に活動。
ドキュメンタリー、映画史、哲学、技術史を引用した作品制作を行う。
近年の個展として、2009 年ガートルート・コンテンポラリーアートスペース（メルボルン）、2007 年にパレ・ド・トーキョー（パリ）などがある。
近年参加した主なグループ展として、2017 年リバプールビエンナーレ、2015 年パラッツォ・リーゾ美術館（イタリア）、2011 年コペンハーゲン国際ドキュメンタリー映画祭（コペンハーゲン）、2009 年モスクワビエンナーレ（モスクワ）など多数。

Fabien Giraud – Raphaël Siboni
1922 – The Uncomputable The Unmanned Season 1, Episode 4, HD video, 26 mn, 2016
© Fabien Giraud & Raphaël Siboni

グラスビード
Glass Bead

芸術、科学、哲学といった複数の学術的、実践的、政治的な交差を考えるリサーチ・プラットフォーム。アーティスト、歴史家、理論家により構成されている。
パリとロンドンを拠点に活動。
オンライン上で記事を公開している他、本の出版、レクチャー、ワークショップなどを行う。メンバーにはファビアン・ジローが含まれている。

Glass Bead's website homepage ©Glass Bead

パメラ・ローゼンクランツ
Pamela Rosenkranz

1979 年、スイス生まれ
現在はチューリッヒを拠点に活動。
映像、彫刻、インスタレーションなどを扱い、人間の実存と虚構、グローバリゼーションと消費社会の問題を扱うことで知られている。
近年の個展として、2017 年プラダ財団（ミラノ）、2015 年ヴェネツィアビエンナーレ（ヴェネツィア）、2010 年ジュネーヴ近現代美術館（ジュネーヴ）、ブラウンシュヴァイク美術館（ブラウンシュヴァイク）などがある。
近年参加した主なグループ展として、2017 年ルイジアナ美術館（コペンハーゲン）、マイン美術館（ドイツ）、2014 年カルマインターナショナル（スイス）、2013 年ヴァルト（ベルリン）、2008 年のベルリンビエンナーレ、マニフェスタ 7（イタリア）など多数。

Pamela Rosenkranz
Skin Pool, 2014
Photo credit : Stefan Altenburger

ティノ・セーガル
Tino Sehgal

1976 年、ロンドン生まれ。
現在はベルリンを拠点に活動。
他人に指示を与え、従来のアートパフォーマンスの領域を踏み越えたパフォーマンス作品を発表している。
またそれらのパフォーマンスを一切記録に残さないことで知られている。
2013 年にヴェネツィアビエンナーレ金獅子賞を受賞。
近年の個展として、2016 年パレ・ド・トーキョー（パリ）、2015 年アムステルダム市立美術館、キアスマ美術館（ヘルシンキ）、2012 テート・モダン（ロンドン）、2010 年グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）。近年参加した主なグループ展として、2014 年ヴェネツィアビエンナーレ/建築（ヴェネツィア）、2013 年ヴェネツィアビエンナーレ（ヴェネツィア）、2012 年第９回上海ビエンナーレ（シャンハイ）、ドクメンタ 13（カッセル）、2010 年光州ビエンナーレ（光州）、2007 年リヨンビエンナーレ（リヨン）など多数。

NO IMAGE

Annlee, 2012
Dimensions variable
Ishikawa Foundation, Okayama

エティエンヌ・シャンボー
Etienne Chambaud

1980 年 フランス、ミュルーズ生まれ。
現在はパリ、ミラノにて制作活動中。
シャンボーはコラージュ、写真、ネオン、絵画、映像などの手法を用いながら、形態・物体・論説の境界線を探求してきた。近年では「世界地図を書き換える」という目的のため筏を大西洋に漂わせる、幾何学的な数字と動物園の猿との遭遇を企画する、など様々な「状況」を作品化する試みを行う。また「自然」という近代の概念形成や、非自然の生態環境と「人間」「人間以外」「非人間なもの」というカテゴリーの関係を分析する、実験的なドキュメンタリー "The Untamed Night" の制作にも継続的に取り組んでいる。
主な個展として 2017 年「The Untamed Night」EMPAC, Troy （ニューヨーク）、2016 年「Incomply」Labor（メキシコシティ）、2011 年「The Encored Separation」アートアンリミテッド（バーゼル）など。また近年参加した主なグループ展としては 2016 年バルセロナ現代美術館「collection 31」、パラサイト（香港）、2014 年「Une Histoire」ポンピドゥーセンター（パリ）など多数。

メリッサ・ダビン&アーロン・ダヴィッドソン
MELISSA DUBBIN and AARON S. DAVIDSON

メリッサ・ダビン
1976 年 アメリカ、ニューメキシコ州　生まれ
アーロン・ダヴィッドソン
1971 年 アメリカ、ウィスコンシン州
現在はブルックリンにて制作活動中。
ダビン&ダヴィッドソンは 1998 年よりアーティスト・ユニットとして活動中。写真、ビデオ、サウンド、パフォーマンス、彫刻、書籍といったメディウムを用いての作品群を発表する彼らは、伝達と受信／干渉と移転のプロセスについて言及しながら、しばしば音、光、空気、時間といった無形または短命な物質のありさまを実体化しようと試みてきた。
2016 年には世界的に有名なピノー・コレクションが運営するアーティスト・イン・レジデンスに参加。近年の主な個展に 2017 年「Bitter Sweet Symphony」untilthen（パリ）、「Poétique des sciences」Fresnoy（トゥールコワン、フランス）、2016 年「Nobody Shoots a Broken Horn in Early Spring」Campoli Presti（パリ）、2013 年 Audio Visual Arts（AVA）（ニューヨーク）など。また Beirut Art Center （ベイルート）、Sculpture Center（ロングアイランドシティ、ニュヨーク）、 Overgaden（コペンハーゲン）、New Museum （ニューヨーク） 、光州ビエンナーレ（光州、韓国）など各国の美術館やギャラリー、芸術祭での展示機会多数。

ミカ・タジマ
Mika Tajima

1975 年ロサンゼルス生まれ。現在はニューヨークにて制作活動中。
現代生活を取り巻くテクノロジーに焦点をあて、ペインティング、立体、映像、インスタレーションなどのメディアを通じて、人間と人工物の関係や、人間が自ら作り出した環境や社会について考察する作品を発表してきた。
2017 年度には New York Artadia Award を受賞。近年の主な個展に 2018 年「MIKA TAJIMA: ATHER」Borusan Contemporary（イスタンブール）、2017 年「After Life」Wadsworth Atheneum Museum of Art（ハートフォード）、2016 年「Meridian(Gold)」Sculpture Center（ニューヨーク）、「Emotion Commune」Protocinema（イスタンブール）、「EMBODY」11R（ニューヨーク）、2014 年「Total Body Conditioning」Art in General（ニューヨーク）など。近年参加した主なグループ展として、2017 年「COLORI」Castello di Rivoli and GAM（トリノ）、「All Watched Over by Machines of Loving Grace」Palais de Tokyo （パリ）、2013 年「六本木クロッシング 2013: アウト・オブ・ダウト」森美術館（東京）など。

Mika Tajima Meridian (Gold)
(installation view in Hunter's Point South Park, NewYork)2016
20 x 144 x144 inches (50.8 x 365.8 x 365.8cm)
Pressurized water vapor system, networked LED bulbs, real-time gold commodity indexes, custom analysis program, wood, pigment, sculpted resin.
Commissioned by SculptureCenter, New York.Courtesy the artist and TARO NASU, Tokyo.
Photo: Yasunori Matsui

（3） 会場

本国際展のテーマを体現する現代アート（コンセプチュアルアート）作品の制作及び展示を行う。屋外展示となるものを除き、原則有料鑑賞とする。

現代アート作品展示会場

旧内山下小学校

岡山県天神山文化プラザ

岡山市立オリエント美術館

林原美術館

岡山県立美術館

岡山城

岡山県庁前広場

旧内山下小学校

旧内山下小学校は、1887 年 5 月、市内小橋町の国清寺内に創立され、1890 年 8 月に岡山城西の丸跡地に移転し、2001 年 3 月の閉校まで同地にあった。現在残る校舎は 1933 年、1934 年に南棟が竣工し、その後 1937 年に東棟、北棟と渡り廊下が増設され、全館が竣工した。市内最古の鉄筋コンクリート造建築の校舎で、比較的簡素な造形の中に当時流行りの様式の反映も見られ、文化財的視点から見ても貴重な建築物である。

岡山県天神山文化プラザ

図書館を核とした「岡山県総合文化センター」として、1962 年 6 月に開館した。建物の設計は、モダニズム建築の巨匠・前川國男によるもので、屋上庭園、ピロティ、吹き抜けレリーフなど、当時のモダンなデザイン手法が随所に見られる。図書館部門が移転した後、2005 年に、岡山県民の身近な芸術文化活動と文化情報発信の拠点施設としてリニューアルオープンした。

岡山市立オリエント美術館

学校法人岡山学園(当時の理事長：故安原真二郎氏)より、古代オリエントの考古美術品1,947点を寄贈された事を機に、1979年に開館した国内唯一のオリエント専門の公立美術館。古代オリエント研究者として著名な三笠宮崇仁親王殿下（1915-2016年）には特別顧問として様々な指導・助言をいただきながら収蔵品の充実につとめ、現在の収蔵品は約4,700点を数える（2018年3月現在)。建物は岡田新一氏の設計で高い評価を得ている。2004年、開館25周年記念事業の一環として取得したアッシリア・レリーフ「有翼鷲頭精霊像浮彫」は、写実的表現で知られる古代アッシリア芸術の頂点をなすものである。開館40周年を迎える2019年には、オリエントの多様な都市文化を紹介する展示・教育普及活動を勢力的に行う予定。

林原美術館

かつての岡山城二の丸郭の一角に位置し、1964年、故林原一郎氏が蒐集していた古美術品をもとに開館した。国宝を含む国内屈指の刀剣コレクションのほか、岡山藩主池田家の伝来品や、現存を確認された国内唯一の平家物語絵巻の完本を収蔵していることでも知られており、ミシュラン・グリーンガイドで、星を得ている。設計は前川國男氏で、正門となっている長屋門は、岡山藩主池田家の分家・生坂藩池田家屋敷門を移築したものである。

岡山県立美術館

岡山県により１９８８年に開設された美術館で、立地的には岡山市の中心街や岡山城、岡山後楽園に近い場所にある。施設の設計は岡山市立オリエント美術館と同じく岡田新一によるものであり、岡山県ゆかりの美術資料の収集を行うという理念のもと、数々の美術品が収集・所蔵されている。

岡山城

豊臣五大老のひとりで、備前美作 57 万石の太守・宇喜多秀家の居城として築かれ、かつては 5 重の堀を擁する巨大な城郭であった。中心となる天守は、関ヶ原合戦前に築かれ、古い様式を伝える貴重な天守のひとつであったが、惜しくも戦災で焼失した。築城と同時に整備された城下町は岡山の都市的起源であり、現在でもその痕跡を各所にとどめている。

岡山県庁前広場

岡山県庁舎は、創設時、天神山(現：天神山文化プラザ)に置かれていたが、戦災による焼失後、上伊福(現：岡山工業高校)への移転を経て、昭和 32 年、現在地へ建築された。設計は天神山文化プラザ、林原美術館と同じく前川國男氏で、水平な窓が並ぶ様式などにモダニズム建築の特徴がよく表れている。

4　ラーニングプログラム

（1） 方針

岡山芸術交流の参加アーティストの作品や展覧会展示作品を素材とし、展覧会テーマや展示作品をより深く掘り下げて理解してもらうためのプログラムを実施する。
アーティスティックディレクターであるピエール・ユイグの指示・監修のもとに企画実施されるプログラムであり、本展の意図や文脈、展示内容を補強、補完して、展覧会とその内容・背景を理解したいと積極的にのぞむ鑑賞者との架け橋となることを第一の目的に掲げる。

（2） 取組概要

岡山芸術交流参加アーティストへのインタビューや、岡山芸術交流会場として予定されている美術館施設との協働、岡山県･岡山市の内外にある学術研究機関等との連携企画などを行う。

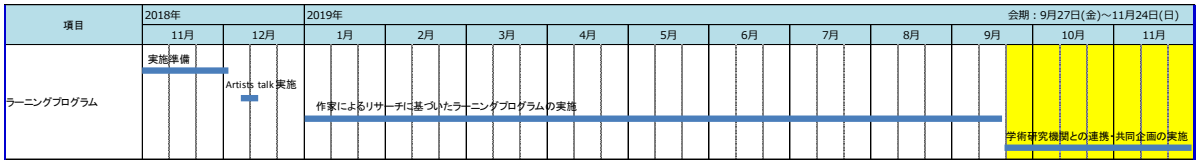
（3） 具体的な取組

2018 年度内に実施される企画は、「Artists talk（参加アーティストは語る）」であり、ピエール・ユイグを含む 6 人の岡山芸術交流参加アーティストのインタビューを公開式で行うという内容。それぞれの制作姿勢や岡山芸術交流に抱く思い、岡山の印象などを問いかけながら、展覧会場となる岡山という「場」の個性をも明らかにしていこうとする企画である。

また、会場予定地についてのリサーチ過程では、リサーチそのものを参加アーティストが体現する異文化と岡山との交流の場ととらえ、積極的にコミュニュケーションを行い、ユイグ監修のもとホームページでの成果発表等の形式で可視化することも検討する。

上記のリサーチとは別に、展覧会の内容やアーティストの個々の作品と関係づけられるテーマを研究・調査している学術研究機関の協力を仰ぎ、学術的な見地からみた本展の展示内容についての講演会やワークショップ、学生による研究成果発表等の、本展関連プログラムの企画・実現を模索していく。

（4） スケジュール



5　パブリックプログラム

（1） 方針

岡山芸術交流が地域に開かれ、浸透し、持続・発展していくため、市民・県民が展覧会により親しんでもらうための各種プログラムを実施する。展覧会への来場のきっかけづくりとしての役割も担うプログラムとして、本展会場以外の場においても広く開催する。

（2） 取組概要

岡山芸術交流の基盤整備と持続可能な開発のためのプロジェクトとして、３つのポテンシャルに関する発掘や連携を行っていく。

①　人のポテンシャル

・地域で活躍する人々と将来を担う人材を発掘

・アートと産業の先鋭者等と連携

②　場のポテンシャル

・文化拠点、オルタナティブスペース等と連携

・新たな出来事が誘発する場の発掘

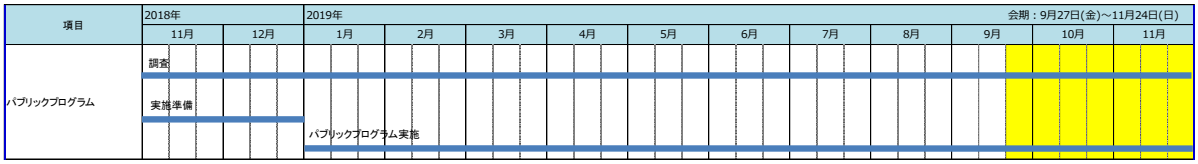
③　文化資産のポテンシャル

・芸術文化に関わる既存の施設等と連携

（3） 具体的な取組

アーティスティックディレクターの示す方向性や展示会展示作品を参照し、市民県民・団体・施設と協働で、鑑賞プログラムやトークイベントなど各種プログラムを行う。また、岡山県下の既存の取組と連携し、関係性を深め、拡張していく。

（4） スケジュール



6　学校連携

（1） 方針

コンセプトの１つ「人を育む」の観点に立ち、岡山の未来を担う児童及び生徒が芸術作品に触れる機会を増加させるとともに、岡山芸術交流 2019 が想像力や感受性をより豊かにする一助となることを目的とする。

（2） 取組概要

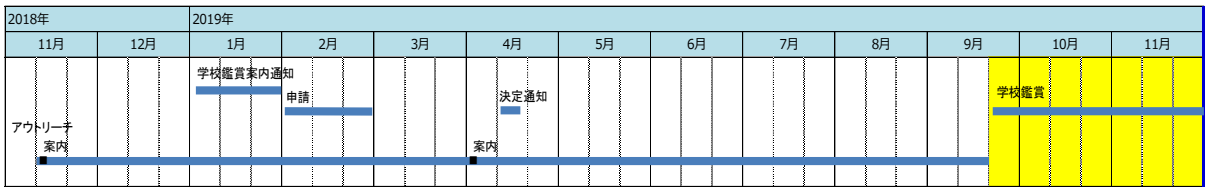
より多くの児童及び生徒が芸術作品に触れる機会を増やすため、県内の教育機関への幅広い事前周知を徹底する。岡山芸術交流 2019 の認知度向上及び鑑賞促進のため、県内の教育機関への鑑賞意向調査を実施し、鑑賞を希望する教育機関に対しては、現代アートの楽しみ方や本展の概要説明等を含めたアウトリーチを実施する。

また、県内の小・中学校の校外学習において鑑賞のために来場する際のバス代の一部を実行委員会にて負担するほか、来場の際には、サポートスタッフや地元芸術関係者等の協力を得て、対話による鑑賞等の分かりやすい案内を行えるよう、体制を整備する。

このほか、高等学校や専門学校、大学等への声掛けを行い、サポートスタッフ等への参加を働きかけ来場者全般に丁寧な案内を行える芸術交流を支える人材の育成を図っていく。

（詳細は、９　サポートスタッフの項参照）

（3） スケジュール



7　広報

（1） 方針

国内外への発信を強化し、「岡山芸術交流」の世界的な現代アート展としての評価の確立を目指すとともに、国内外からの誘客に結び付けていくことを目的とする。

（2） 取組概要

展覧会への来場、各種プログラムへの参加、サポートスタッフへの参加促進のため、岡山県内に対しては、行政・教育機関・報道機関・交通機関等様々なルートを通じた広範囲の情報発信を行う。

国内に対しては、岡山県・岡山市・民間事業者が実施する観光プロモーション等とも連携した広報活動を展開するとともに、前回 2016 年開催において県外来場者の大半を占めた首都圏・関西圏地区に対して積極的なＰＲ活動を行う。

また、芸術交流のコンセプト、国際的な評価を広く定着させるため、海外向け広報の強化が必要である。ヨーロッパ・アメリカのアートメディア等、ツーリスト向け情報発信を行うとともに、誘客を図る面から、岡山と直行便によって結ばれ、訪問観光客が多く、また現代アート展の開催が盛んな台湾・香港・韓国を中心に東アジア地域へのプロモーション活動及び情報発信を強化する。

（3） 情報発信活動

各ターゲットに適した広報計画を立てて、効果的な情報発信を行う。開催前年度は岡山芸術交流 2019 の認知獲得、開催年度は来場促進を目指し、広報活動に取り組む。

①　海外向け広報

岡山県･岡山市等が出展する観光事業者向けのイベントや説明会にて岡山芸術交流 2019 の周知を行う。

また、欧米及びアジア圏にて人気のある旅行情報のウェブサイト等へ記事を掲出し、岡山を訪れる外国人観光客の本展への誘客を目指すとともに、海外のアートフェア等での周知、海外アート系メディア等を通じた積極的な情報発信を行う。

このほか、瀬戸内国際芸術祭とも相互連携を図り、露出の拡大を図る。

（詳細は、１０　連携・協賛の項参照）

②　県外向け広報

前回開催時に県外来場者の約６割を占めた首都圏・関西圏で開催される観光事業者向けのイベントや説明会、商談会等にて、本展の周知を図る。

現代アートへの関心が高い層に対しては、アート系及びライフスタイル提案系の媒体を通じた露出を図るとともに、県外の美術施設にも幅広くチラシ・ポスター等を配布することで

情報発信を行う。

③　県内向け広報

プレスリリースや市長会見等の機会を活用し、地元メディアへの適時適切な情報発信を実施するとともに、アート関係者を招いたシンポジウム等を通じて市民・県民への事業周知及び来場意欲の喚起を図る。

テレビ・広報紙・ラジオ等の市有媒体による露出のほか、市内・県内の主要箇所や会場周辺、公共交通機関等へのフラッグ・ポスター等を掲出し、効果的に情報発信を行う。

また、地元住民への周知や巻き込みも行い、新たなファン層の拡大を目指す。

（詳細は、１０　連携・協賛の項参照）

（4） 広報ツール

アーティスティックディレクターのピエール・ユイグが選定した岡山芸術交流２０１９公式デザイナーとして、高田唯（グラフィックデザイナー）にポスターやチラシ等のデザインを依頼。統一されたデザインのもと、各制作物へ展開。

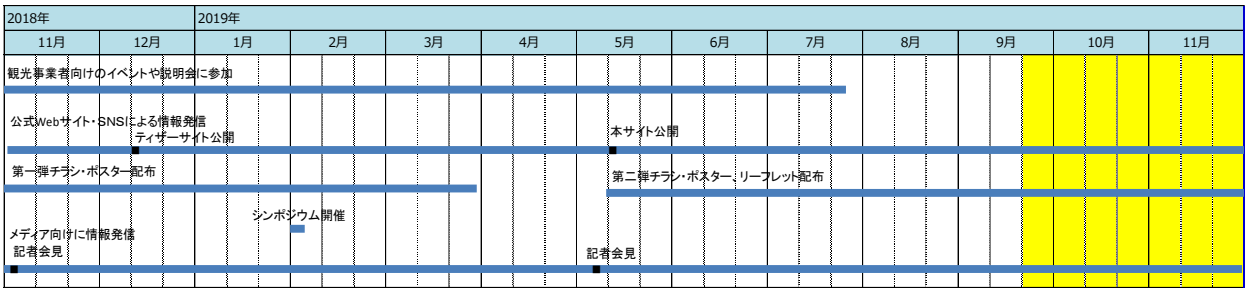
①　制作物

時期に合わせて新情報を盛り込み、チラシやポスター等を作成する。市内各所だけでなく、市外・県外にも配布する。

②　公式Ｗｅｂサイト・各種ＳＮＳ

アーティスト来岡に関する情報やイベント開催情報等、新しい情報を頻繁に発信するツールとして活用する。

（5） スケジュール



8　来場者対応

（1） 方針

会場が複数施設に設定され、徒歩圏内ではあるものの、施設間が数百メートルの距離で点在し、また会場に隣接して観光施設・文化施設が数多く立地している。これらの施設も併せて楽しめることが岡山芸術交流の重要なコンセプトのひとつであり、魅力でもあるため、来場者が効率よく、かつ、スムーズに鑑賞ができるようにすることが重要である。

（2） 取組概要

① インフォメーション設置

メイン会場となる旧内山下小学校、玄関口である JR 岡山駅後楽園口（東口）前広場にインフォメーションセンターを設置し、会場や作品、イベントの案内等岡山芸術交流 2019 の総合案内や、近隣の観光案内、鑑賞券等の販売を行う。

② バリアフリー対応

各会場においては、バリアフリーに配慮するとともに選任スタッフを配置する等、あらゆる来場者にやさしい会場づくりを行う。

③ 来場者への情報提供

・二次交通

来場者が効率よく鑑賞できるよう、バスや路面電車の時刻表やコミュニティサイクル等の公共交通機関の停留所の場所を情報提供する。

・周辺施設

会場のバリアフリーやトイレの情報、会場周辺の飲食施設等の情報をガイドブックやウェブサイト等にて情報提供し、快適に鑑賞ができるようする。

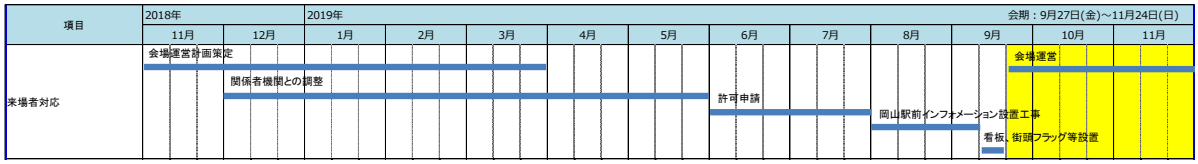
・巡回コース

効率よく会場を回るため、県外からの来場者を対象とした半日、１日コースのほか、瀬戸内国際芸術祭と岡山芸術交流を回る長期滞在コース、テーマや種別に応じたおすすめ鑑賞コース等のモデルコースを作成し、ホームページや会場にて案内する。

・多言語対応

海外からの来場者も多数見込まれることから、多言語対応、インターネット無料接続サービスの提供について取り組む。

（3） スケジュール



9　サポートスタッフ

（1） 方針

岡山芸術交流 2019 会期中の運営サポートをはじめ、来場者の方々に芸術交流鑑賞とともに岡山の街を楽しんでいただくための「街のコンシェルジュ」となり、ともに芸術交流を盛り上げていく人材育成に取り組む。

（2） 取組概要

①　サポートスタッフ募集方法

募集用 Web サイトを立ち上げホームページや SNS で広く募集を行うとともに、県内企業や大学・専門学校へ訪問し、多くの学生へ積極的な参加を働きかける。募集にあたっては、参加メリットや多くの活動内容を提示し、様々な分野の方々が応募しやすい募集方法を検討する。

②　育成・研修内容

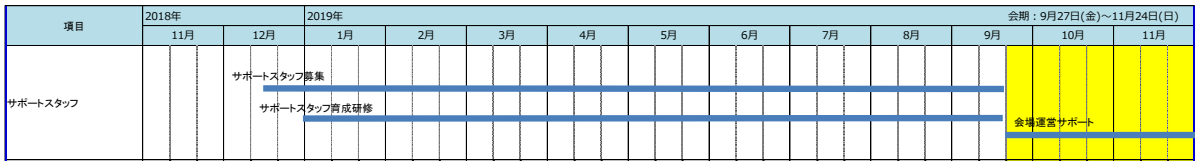
継続的に開催を支えていくための人材育成カリキュラムを編成する。内容は、参加者が集いやすくするため「現代アート」、「接客」、「岡山の歴史・観光」等、様々なカテゴリーごとに階層式の研修を実施する。特に「現代アート」のカテゴリーでは、「アートナビゲーター養成コース」を設置し、対話による鑑賞法の研修を実施する。また、「学生向けプログラム」、「１day プログラム」等、参加者のニーズに合わせた研修を企画実施する。

研修の実施にあたっては、会場近くの商店街等を会場にして学生や市民・県民が参加しやすいスタイルで実施する。

③　会期中のサポートスタッフ業務

会期中には、受付、作品看視・案内等、各会場での来場者対応のほか、実行委員会が認めるプログラムの補助や開催の記録（撮影）等を行う。

（3） スケジュール



１０　連携・協賛

（1） 方針

岡山芸術交流 2019 の開催を通じて、文化芸術団体や企業との連携･協力を進めていくことにより、開催の効果を会場周辺エリアを超えて広く波及させ、地域全体の盛り上げを図る。

（2） 連携概要

岡山芸術交流 2019 と同時期に開催される芸術交流と親和性の高いイベント、あるいは県内で開催される文化・芸術イベント等と連携・協力を図ることで相乗効果を生み、互いの地域の盛り上げにつなげる。

（3） 具体的な取組

①　学校との連携

（詳細は、６　学校連携の項参照）

②　地域との連携

地域の NPO 団体と連携しながら、鑑賞支援を行い、地域の中で芸術交流を支える人材を育成する仕組みづくりを図る。

また、地元住民への周知や参加を促進するため、教育機関や地域住民、企業等を対象に、現代アートの楽しみ方や本展の概要説明等を含めた出張説明会を積極的に実施し、本展に興味・関心をもってもらいながら、新たなファン層の拡大を目指す。

③　美術館等との連携

現代アートを展示している美術館等と連携し、市民・県民を対象にしたプログラム等を実施し市民・県民の現代アートへの関心を高め、本展来場への機運を高める。

④　他事業との連携

2019 年にほぼ同日程で開催される瀬戸内国際芸術祭（秋会期）と印刷物等による相互の情報発信等、主に広報面での連携を図る。

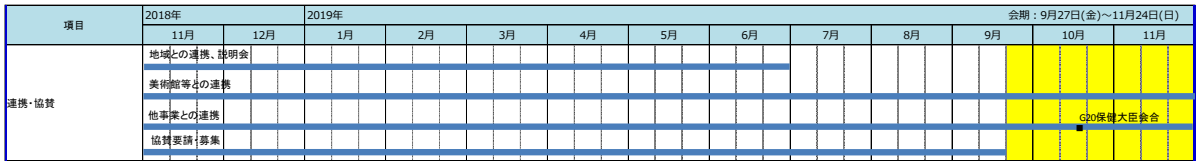
このほか、現代アートと親和性の高いイベントならびに多数の集客が見込めるイベント等と連携を図り、より高い情報発信効果を目指す。

また、2019 年 10 月 19 日、20 日に岡山市で開催される「G20 保健大臣会合」参加者の受入れ等、世界に向けて岡山芸術交流 2019 を発信する。

（4） 協力・協賛

岡山芸術交流の開催趣旨に賛同する企業等に対し、チケット協賛や協賛金額に応じた特典を設け、様々な形での協力・協賛や寄付を働きかける。特にチケット協賛を新設することとし、企業等とのパートナーシップを築いていくことで、芸術交流の地域への浸透を図る。

（5）　スケジュール


項目
2018年
2019年
会期：9月27日(金)～11月24日(日)
11月
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
連携・協賛
地域との連携、説明会
美術館等との連携
他事業との連携
協賛要請・募集
G20保健大臣会合

１１　鑑賞券、オフィシャルグッズ

（1） 方針

来場者が、会場間を回遊できるような利便性の高い鑑賞券制度を検討する。また、岡山芸術交流 2019 の鑑賞記念となるようなオフィシャルグッズを開発・販売する。

（2） 取組概要

① 鑑賞券

次のとおり鑑賞券の価格を設定し、電子鑑賞券販売業者、県内プレイガイド、旅行代理店等を通じ効果的な鑑賞券販売促進を行う。特に、県内の盛り上がりを図るため県内の鑑賞券販売促進に努める。また、会期中は、上記に加え有料会場や岡山駅前インフォメーションセンターにおいても鑑賞券を販売する。

「前売券」は「引換券」であり、会期中に会場等で当日券に引き換えるものとし、前売券販売時期は、詳細企画発表後を予定。

区分	一般	一般（県民）	学生	高校生以下	65 歳以上	団体	単館
前売券	1, 000 円			—	—	—	—
当日券	1, 800 円	1, 500 円	1, 000 円	無料	1, 300 円	1, 300 円	500 円

※障がい者、介助者 1 名は無料

※学生とは、大学生、専門学生

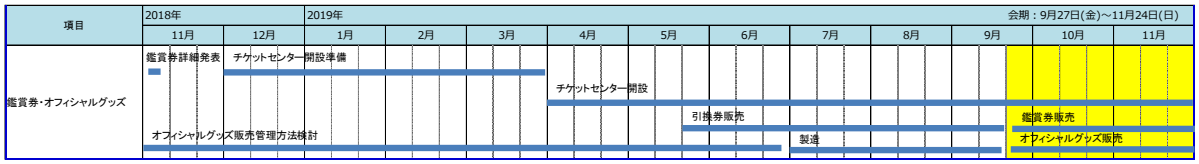
※団体は、8 名以上

※単館とは、1 会場のみ鑑賞可

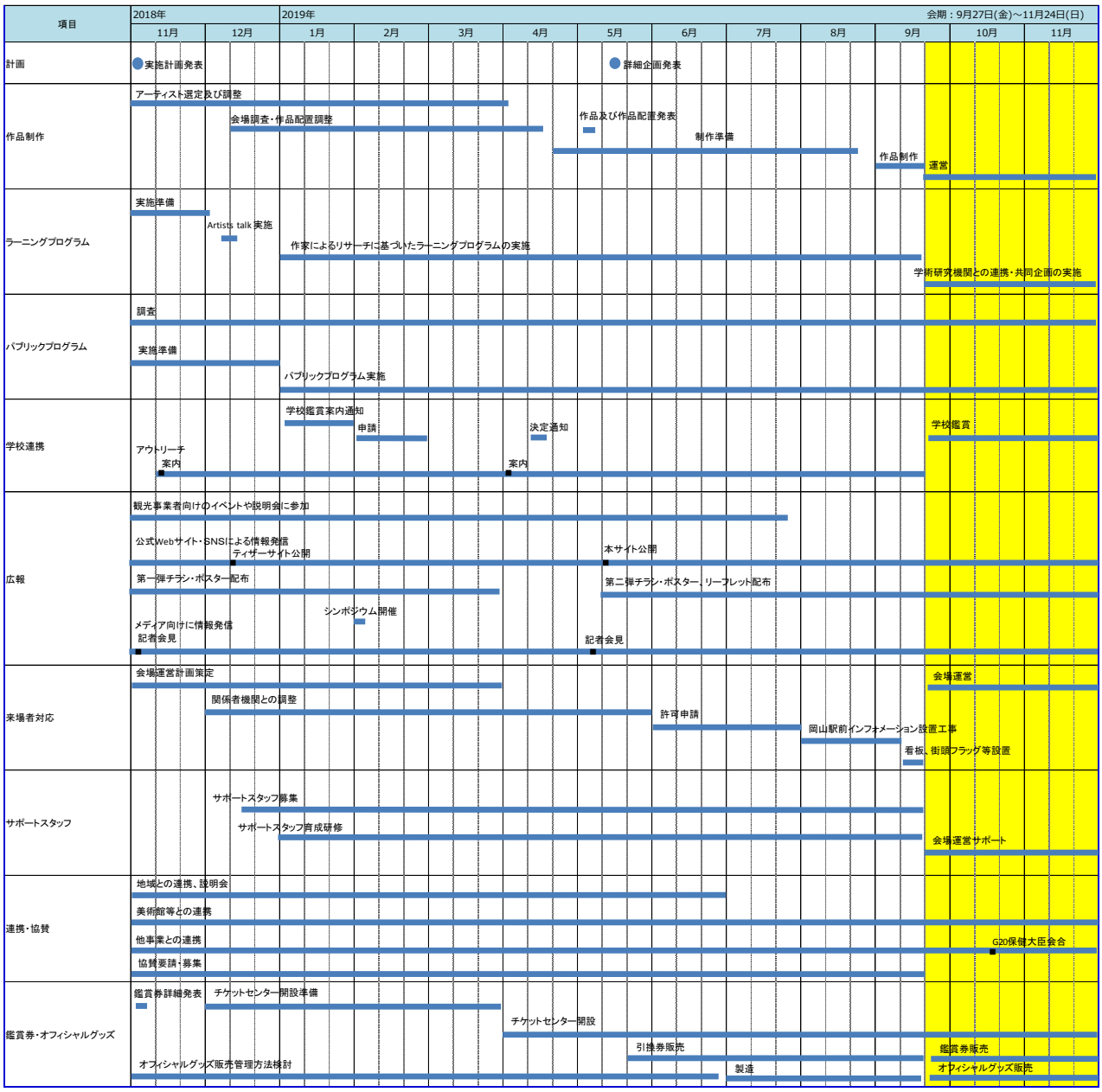
② オフィシャルグッズ

芸術交流のロゴマーク、2019 メインビジュアル等を用いたグッズの開発、販売管理方法等は引き続き検討する。

（3） スケジュール



１２　全体スケジュール



本計画についてのお問い合わせ

岡山芸術交流実行委員会事務局

〒700-8544　岡山市北区大供一丁目 1-1　岡山市役所本庁舎3階

TEL：086-221-0033　｜　FAX：086-221-0031　｜　E-MAIL：info@okayamaartsummit.jp

WEB：www.okayamaartsummit.jp